スキルス胃がんの進行早める「播種」

原因遺伝子を特定

白血病治療薬が有効

九大病院別府病院、大分大 東大などの研究チーム

九州大学病院別府病院（三森功士教授）と大分大学医学部消化器・小児外科学講座（猪股雅史教授）、東京大学医科学研究所などの研究チームは、スキルス胃がんのがん細胞が臓器を覆っている腹膜に散らばって転移していく「腹膜播種（はしゅ）」の原因となる遺伝子を特定した。3日付の米国科学誌「サンエンティフィックリポート」電子版に掲載された。（小田原大周）

スキルス胃がんは、他のがんに比べて若い患者が多いのが特徴で、短期間に進行、転移して亡くなることも多い悪性の強いがんの一つ。腹膜播種は胃がん末期の症状とみられるが、発症のメカニズムは分かっていなかった。今回の成果は、進行を抑え、治療中の生活の質の改善に役立つと期待される。

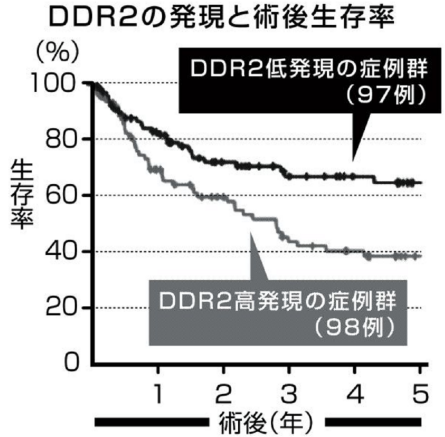
研究は、国の最先端・次世代研究支援プログラム助成で実施。腹膜播種状態のマウスの遺伝子を分析し、遺伝子の中にある「DDR2」と呼ばれる変異群が関わっていることを突き止めた。

胃がんでのDDR2の発現と生存率についての関係を調べるため、米国のがん解析の公共データベース「TCGA」を使って解析した。その結果、胃がんでDDR2の発現が多い（高発現）症例は、少ない（低発現）症例に比べて進行が早く、生存率が低いことが分かった。

DDR2を狙って働きを阻害（邪魔）する薬（分子標的薬）で、白血病の治療薬として使用されている「ダサチニブ」が、胃がんの腹膜播種でも有効なこともマウスへの投与実験で分かった。

近年、遺伝子解析の迅速化などの技術革新や、大量のデータを解析して特徴をつかむビッグデータ解析で、これまで使用していた薬が目的としていた病気以外にも効果があることが見つかる「ドラッグ・リポジショニング」が注目されている。

三森教授は「今回効果が確認されたダサチニブの胃がんへの効果の検証を進め、いち早く保険が適応されるようにすることで、治療に役立てたい」と話した。



日本胃がん学会が最先端の治療紹介

19日、別府で講座

日本胃がん学会総会の市民公開講座「胃がんとの付き合い方」が19日午後3時半から、別府市のビーコンプラザである。入場無料。

がん研有明病院（東京都の医師5人が、ピロリ菌と胃がんの関係や診断法、抗がん剤や小さな傷で済む手術などの治療法について説明する。

総会の会長を務める佐野武がん研有明病院消化器